基幹労連第10回定期大会 挨拶(要旨)

2012年9月6日

仙台市「サンプラザホール」

中央執行委員長 神津 里季生

* はじめに

皆さんご安全に！

それぞれにご多忙の中、多数お集まりをいただいたことに感謝を申し上げます。本定期大会、私たちは、ここ東北、杜の都・仙台に開催の地を定め、本日を迎えたところでもあります。さきほど黙祷を捧げさせていただきました。またさきほど司会からもお願いをさせていただいておりますが、あらためて参加者全員の浄財を集めさせていただいております。どうかよろしくお願いを申し上げます。

あの悪夢のような大災害から、もうじき一年半になろうとするわけですが、私たちは決してその記憶や教訓を風化させない、決して復旧・復興の手を緩めない、そのことをお互いに誓い合いたいと思います。そしてあらためてインフラ復興労連たる基幹労連の組合員一人ひとりがそれぞれの持場立場で力を発揮する、中央本部・県本部は被災組織の組合員の率直な声を引き続き政治・行政につないでいく、そのことを決意として申し述べておきたいと思います。

* 本定期大会の意義

さて本定期大会は、これまでの経過を振り返るとともに、迎える新たな第6期、向こう2年間の運動方針をはじめ、様々な運動課題についての認識をあわせていく大事な場でもあります。

私たちは東日本大震災という、あの自然の猛威を目の前にして、なんと一人ひとりの人間の力は小さなものであるか、また人間の命とははかないものであるかを思い知らされました。しかし同時に、だからこそ私たちは力を合わせて様々な困難に立ち向かっていかなければならないのであります。

私たちの職場、私たちの組織も、危険要因を克服して如何に安全を確保していくか、あるいはグローバルな競争の中でどのようにして雇用と生活を守っていくか、そしてどのようにして人材を育て、さらなる将来を切り拓いていくかという闘いのなかに毎日があるわけです。働く者一人ひとりの力は限られてい

でも、連合 680 万、金属労協 200 万、そして基幹労連 25 万 5 千人の力を結集していけば、可能性は限りなく広がっていく、そのことをお互いに確認し合いたいと思うところでもあります。

運動方針案等の個々の内容については重複を避ける意味でも私から言及することはせず、工藤事務局長をはじめとしたコメントに委ねたいと思います。この場では特に、直近の政治動向に対する受けとめと、政策実現の取り組みに関わる考え方、この二点に絞って、以下、私の考え方を述べておきたいと思えます。

* 政治動向に対する受けとめ

政治に対する組合員の見方は実に厳しいものがあると認識しています。職場の第一線でご奮闘いただいている役員の方々はその厳しい声に直面をされています。いやそれどころか、役員の方々ご自身が、少なからず民主党に対する支持の熱意を失ってしまっている。誠に残念なことですがこれが実情であり、後ほど詳しくご報告をする意識調査結果でもその赤裸々な実態が明らかになっています。

だからこそ私は訴えたいと思えます。それは、私たちは、政権交代を実現したこの数年の動きの意義、大きな流れの意味合いを見失ってはならない、そして現在の野田政権が実現している、「決められる政治」の価値を見損なってはならないということです。

順不同となりますが、まず現在の野田政権に対する評価に触れておきます。

私は 2 月の中央委員会において、「過去の自民政権が先送りしてきた幾多の問題をどのようにして克服し、前に進めていくかということが、まさに通常国会の大きな課題であり、今国会は、この国の命運を決する国会であるといつて過言ではない。」と申し述べました。

野田首相は、社会保障と税の一体改革の法案を成立させました。私はこのことの意義は計り知れないものがあると思えます。増税の側面ばかりを強調し野田首相を叩く勢力やそれを煽り立てるマスコミがありますが、人の嫌がることであってもあえて国のため、将来世代のために、火中の栗を拾った勇気とリーダーシップを、私たちはしっかりと認識しなければなりません。

また一方では、野田首相の政策遂行に対し、本来の民主党らしさがなく、まるで保守本流ではないか、という言い方があります。なぜそのように見えるのかをよく考えていただきたい。かつては保守本流を誇っていた自民主党がさぼり

続けてきたから、そしてどの政党であろうとも与党として当然やっておかなければならないことまでほったらかしにしてきたから、だから今、この国を窮地から救うために野田さんが必死になっているのではありませんか？領土問題も全く同じ図式です。自民党には現政権を批判する資格などないのであります。

次にもうひとつの要素です。私たちは、政権交代を実現したこの数年の動きの意義、大きな流れの意味合いを見失ってはならないという点です。働く者、生活者本位の政治、格差社会のなかで痛めつけられる弱者に手を差し伸べる政治への転換をスタートさせたということです。

具体的な施策としても、年金・子育て・医療の各分野においてその立て直しを進めています。1270万人分の年金記録を回復させたこと、児童手当の概念を転換し金額を引き上げたこと、診療報酬を10年ぶりに引き上げたこと、生活保護の母子加算を復活させたこと、高校無償化により経済的理由による中退者を半減させたこと、小中学校の耐震化率を67%から90%にまで引き上げたこと等々枚挙にいとまがありません。雇用の問題についてもセーフティーネットの強化・拡充が図られてきています。

もちろん、わが国経済を本格的な成長軌道に復活させていくことをはじめまだまだ課題は山積です。しかし、あつという間に抵抗野党になってしまった自民党の対応やねじれ国会という難局のなかにあってもこれだけのことを実現し、大きな流れを着実に進めてきているのであり、我々はこの認識をもっと拡げていかなければなりません。もしあのまま漫然と自民党政権が続いていたら一体どうなっていたのかということです。

また、今選挙を行ったら第3極が大幅に議席を伸ばすだろうとも言われています。維新がなんとかとあって、あの方々は本当にマスコミを使うのが上手です。しかし私にはあの方々や、選挙目当てでそこに吸い込まれていく人たちが国政を牛耳った時に、生活者本位の政治、働く者の権利を尊重した政治が進むとはとても思えません。私たちはしっかりと目を凝らして、本物と偽物を見分けていかなければなりません。

一方で私たちはこれまでの国政選挙の候補者推薦のあり方についても大きく見直して行かなければならないと考えます。基幹労連の政策に本当に賛同している候補者なのか否か、日頃の言動との関係も含めて厳しく精査していかなければなりません。

結果として推薦候補者数は従前からすると相当程度絞られたものとなることも有り得ましょう。しかし私たちの、この3年間の教訓を活かしていくことが、

基幹労連という産別の使命であると私は考えます。既に関係する県本部との間で様々な検討をはじめています。そのことをご報告しておきたいと思います。

* 政策実現の取り組み

以上ここ最近の政治状況に対する私なりの見解を申し述べてきました。私たちはこのように、常に、何が本当に正しいのかを愚直に追求していかねばなりません。

その一方で、私たちは、自分たちの政策を実現していくためには、戦略・戦術として何が今大事なのかということについても、現実を直視しつつ、危険予知を含めて、しっかりと取り組んでいかなければなりません。

今年の取り組みは、お互いの信頼をベースに展開していこうということで進めてきています。私はこの、お互いの信頼をベースに取り組みを展開することは、労働組合の活動のまさに命であると考えます。

もちろんのこととして、現実には冷静に見極めていかねばなりません。いや現実を冷静に見極めるからこそ、「お互いの信頼をベース」にする取り組みに常に立ち返って実態を見極めていくことにつながるのだと思っています。そのことを強調しつつ以下、二つのことを申し述べておきたいと思います。

一つは、私たちは教条主義的な団体ではないということです。たとえて言うならば、特定のイデオロギーや特定の宗教を軸にして集まっている組織ではないということです。そしてそのことに伴って組織としての強さも弱さもあるということです。

組合員はまずもって普通の国民であり市民であります。半数以上が無党派層という調査結果も出ています。これらの多くの方々は政治の世界は、自分たちとは関係がないという感覚かもしれません。度重なる永田町の混乱はこの意識に拍車をかけています。

したがって自分自身で納得をしないと、基幹労連の取り組みの支持者にはならないということです。

私たちの拠り所はイデオロギーでも宗教でもない、しかしまた、単なる無党派層のままでは自分たちの政策実現はおぼつかないということなのです。だからこそ、お互いの信頼関係をベースにした、一人ひとりの取り組みこそが命であるということです。

このように信頼関係がベースであることは疑いの余地がありません。

一方、組合の運営においては、信頼関係のベースの形にも様々ある。そのことをよく見極めておくことが重要です。第二点目としてその点に触れておきたいと思います。

「よっしゃわかった。お前がそう言うのであればそれを信じる」、というスタイルが一つです。これは時代を超えて貴重な姿です。私自身旧人類の年齢の男ですし、またいわゆる体育会系の一端をかじってきた人間でもあり、このスタイルはよくわかります。政策実現を含めた組織運営の様々な側面において力を発揮してくれています。

しかしそれだけでは難しい。価値観の多様化の中で、組合員の気質も大きく変わってきている。そのことは皆さん方が、そして職場第一線の役員の方々が誰よりもよくご存知と思います。

しかしそのようななかでも日常の組織運営は回っています。もちろん、それぞれの持ち場立場の役員が頑張っているからこそ回っているのですが、その土台には、先人の苦労の積み重ねによって成立した今日の成熟した運営風土があることを見逃してはなりません。

一つの成熟した運営風土がある中であっては、組合員一人ひとは、無意識のうちに、包括的に職場の役員に懸案事項の対処を任せている、という姿がほとんどではないでしょうか。そして役員の方も良かれと思って、いちいち忙しい組合員の時間を奪わずに、その手をわずらわすことなく、常識の範囲内ですませることもあるかもしれません。

私はそのことの全てを否定するつもりはありません。労使関係もかつての対立だけを旨とする労使関係からは脱却し、基本的には安定し成熟してきているわけです。しかし、全ての課題に対し常にそのパターンで回していくこととできれば、組織の力は衰え、力を発揮すべき時に的確な対処をすることができなくなります。そのことを肝に銘じておかなければなりません。

目を外に転じるならば世の中は矛盾だらけです。そして長年の決められない政治・先送りの政治がたたたり、私たちのものづくりの基盤は危機にさらされているのです。組合員一人ひとりのつながりをしっかりと保ち、団結していかなければ危機は乗り越えられないのであります。

以上本日は、今後の政策実現活動に向けて思うところを時間を割いて申し述べてきました。ある意味当たり前の内容でもあり、皆さん方からすれば「委員長、そんなことはわかっとなります。その上でどうすればいいのかが肝腎なことではないですか」ということだろうと思います。

その通りです。私はここから先は、「当たり前のこと」をどのようにして地道に積み上げていくかが全てを決すると考えています。

これまでの取り組み状況をそれぞれの組織が、それぞれの段階で、虚心坦懐に見極めることが不可欠です。職場第一線の組合役員の努力がそのまま結果につながったものとなっているのか、それとも難しい環境条件を反映した内容となっているのか、あるいはまた組織の状況によりバラツキの大きい結果となっているのか。

いずれにしてもやるべきこと、すべきこと「当たり前のこと」とは何かをしっかりと見極めていくことが大事です。これから本格化する取り組みに対して、どうか忌憚のないご意見を寄せていただきたいと思います。本部としてもこれからの新たな展開においてしっかりと発信をしていくことを決意として申し述べておきたいと思います。

最後にもう一つ、究極の「当たり前のこと」を申し添えて私の挨拶を終えたいと思います。それは、とどろきさんの名前を全ての組合員に知ってもらうことです。私たちのために連日連夜頑張ってくれている、そのことを、とにかく知ってもらうことです。何度も何度も説明し、とどろきさんの存在を記憶してもらうことです。そこからしか私たちの政策実現の力は生まれません。

失敗は許されません。

共に頑張りましょう。ご安全に！

以上